

《論 説》

晩年のリカードと価値尺度論争

——1823年の手紙を検討して——

羽 鳥 卓 也

1 晩年のリカードの価値論研究

周知のように、リカードはかれの生前最終版である『原理』第3版(1821年刊)の価値論の章のなかで、隔たった時点における商品の相対価値の変動をひきおこす原因について考察しつつ、つぎのような所見を提示した。——商品の相対価値の変動をひきおこす原因はふたつある。ひとつは、この期間におけるある単一もしくは複数の種類の商品の生産に投下される労働量の増減であるが、もうひとつの原因は、賃金の騰落による利潤率の変動であって、これは諸商品が異なる固定・流動資本比率をもつ資本、あるいは異なる回収期間を要する資本の使用によって生産されているため、賃金率ないし利潤率の変動からその価値に異なる大きさの影響を受けるためである。しかし、こういうふたつの原因のうち、相対価値の変動にはるかに重大な影響を及ぼすものは前者であって、後者の作用は「比較的輕微」である。その点は、われわれが諸商品の価値を測る尺度を、つねに同一量の労働の投下によって生産され、しかも各種商品の生産諸条件のなかの「中位」の条件の下で生産されると想定した財貨のなかから選び、こういう尺度で各種商品の価値の変動を測れば、直ちに明らかになるだろう。それゆえ、隔たった時点における諸商品の相対価値の変動をひきおこす基本的な要因は、それらの生産に投下される労働量の増減だといわなければならない。

だが、こういうリカードウの所論は、投下労働量による価値規定に立脚する論者の立論としてはいくら物足りない感じを読者に与えるかもしれない。なぜなら、リカードウは相対価値と絶対価値とを峻別する必要を説きつづけてきたのだから、隔たった時点における諸商品の相対価値の変動という事態を観察した時には、かれはただ相対価値変動の主要原因を明らかにするだけではなく、その期間に各種商品についてその絶対価値が果して不変を維持したか、それとも騰貴もしくは下落したかを明らかにすべきであったのに、かれは第3版ではその点についての論及を避けてしまったからである。

かれが第3版で隔たった時点における各種商品の絶対価値の動きについて言及しようとしなかったわけは、当時のかれが「絶対価値の標準尺度」をどのようにして見出すことができるかという問題⁽¹⁾に対してみずから納得しうる解答に到達していなかったためである。当時のかれが「絶対価値の標準尺度」を探索する必要を痛感したのは、つぎのような事情からであった。

別稿で詳論したように、かれは第3版の価値論の章のなかで、諸商品の生産に投下される資本の回収時間に差異がある場合には、同一投下労働量の諸商品であっても、それらの価値はけっして同一にはならない、と指摘していた。つまり、かれの意見では、賃金ないし利潤の変動によってひきおこされる商品の相対価値の変動を問題にする以前のところで、商品価値はそもそも

(1) 1821年1月25日づけのマカァロクあての手紙のなかで、リカードウは『原理』第3版のために書かれた価値論の章の完成原稿がすでに印刷中であると書くとともに (cf. *Works*, V III, pp. 342—3.), つぎのような興味ある内容の文章を記していた。「学兄に度たびお話してきましたように、私は価値についてこれまで私と与えてきた説明に満足してはいないのです。なぜかという、私には私の標準尺度をどこから選び出すべきかということが正確には分らないからです。私は商品に実現された労働量をその相対価値を支配する基準として選ぶことが正しい方法だと十分に確信しているのですが、しかし絶対価値の標準尺度を選び出そうとすると、果して一年間の労働、それともひと月にわたる労働、一週間の労働、一日の労働のうちのいずれを選ぶべきかという点で、私は決断しかねているのです。」(*Works*, V III, p. 344. ただし、傍点は引用者の施したものの。)

投下労働量に正確に比例して決定されているのではないということが認められなければならない⁽²⁾というのである。

そうすると、投下労働量による価値規定は各種商品の生産に投下される資本の回収時間の差異によってある「修正」を受けざるをえないということになるから、リカードにとっては当然それぞれの商品の絶対価値はどのような手続きをすれば正確に測定できるのかという問題がおこってくるし、またこの問題が解決されない限り、隔たった時点での各種商品の絶対価値の動きを明らかにすることはできないということになるのである。

以上で明らかになったように、リカードが第3版で、隔たった時点における商品の相対価値の変動の原因を考察しながら、その期間における各種商品の絶対価値の動きについて言及しなかったのは、当時のかれが「絶対価値の標準尺度」を見出しえなかったからである。かくして「絶対価値の標準尺度」の探索が第3版刊行後のリカードの主要な研究課題となった。かれがその探索の成果をとりまとめて一個の論説に仕上げようと決意し、みずから「絶対価値と交換価値」という表題をつけた草稿を執筆しはじめたのは、1823年8月上旬であったと推定される。だが、その時からわずかひと月後に突然の病がかれの生命を奪ったため、この草稿は未完のままで残された。この遺稿が『原理』第3版以後のかれの価値論研究の達成を体現していることは確かだろうが、しかしかれ自身の十分な推敲を経たものとはいえないこの未完の草稿はけっして平明な敘述から成っているとは言いがたい。草稿の敘述のなかからリカードの真意を汲みとろうとする読者は、そのために必要ないくつかの準備作業を行っておかなければならないように思われる。

必要な準備作業のひとつは、1823年におけるリカードとマルサスとの間、およびリカードとマカアロクとの間で文通によって行われた価値尺度論を

(2) 拙稿「リカードにおける価値と自然価格との乖離」(Ⅱ)(岡山大『経済学会雑誌』12巻1号)第4節参照。

めぐる論争を検討することである。リカードが遺稿「絶対価値と交換価値」を執筆したのも、こういう二人の友人との論争に触発されたところが少なくなかったように思われるのであり、この遺稿のなかには当時のリカードあての手紙のなかに記されたマルサスやマカァロクの見解に対するリカードの批判的検討の跡が少なからず見出される。こういった事情を考慮して、われわれは本稿で、晩年のリカードの価値論研究の達成を示す「絶対価値と交換価値」の内容を理解するための準備作業として、1823年におけるリカードとこの二人の友人との間の文通による価値尺度論をめぐる論争について考察したいと思う。

マルサスの小著作『価値尺度論』は1823年4月に刊行された。商品の価値を正確に測定しうる尺度は当該商品の支配労働量に求められなければならない、それは市場で商品なり貨幣なりと交換されるものとしての「労働」のみがそれ自体の価値が不変である唯一の商品なのだからだという所見がマルサスの著作の核心であった。リカードはこの著作を発刊後直ちに通読したらしいが、4月29日づけのマルサスあての手紙のなかで、マルサスの所見を真向から批判した。この手紙を皮切りにリカードとマルサスとの間には価値尺度の選定問題をめぐる論争が文通によって展開され、9月11日のリカードの死に至るまで継続した。この間に両者ともに数通の手紙を書いたように思われるが、現存するものはリカード発信のもの6通であるのに対して、マルサス発信のもの3通である。なお、両者の間を往復した手紙の文面からみて、マルサスは5月上旬ないし中旬に一通の手紙をリカードにあてて書いたと思われるが、この手紙は失われたものらしく現存していない。われわれは次節で上記の手紙を資料として利用することによって両者の論争について考察したい。

さて、このように4月以来文通によってマルサスとの論争に携わっていたリカードは、5月ないし6月にロンドンではじめて友人マカァロクと会見する機会をもった。エディンバラ在住のマカァロクがこの年5月中旬から6

月末へかけてロンドン訪問の長期旅行を企てたからである。マカアロクのロンドン滞在中にこの二人は価値論に関する問題を中心にして口頭での討論を行う機会をもったようであるが、討論は投下労働量による価値規定の理解をめぐる両者の間に小さくない意見の差異があることを顕在化し、話し合いは物別れに終る結果になった。リカードウは7月13日づけのマルサスあての手紙のなかで、マカアロクとの会談の模様を簡単につぎのように報じている。「マカアロクと私とは別れる前に価値の問題を解決するまでには至りませんでした。——それは一回の会話のなかで解決するには難かしすぎる問題なのです。」⁽³⁾

物別れに終わった討論は8月に入ってから文通によって継続されることになった。リカードウの死が訪れるまでにかれは3通の手紙をマカアロクにあてて書き、後者は2通の返信を書いた。われわれは本稿第3節でこれらの手紙を検討しつつ、リカードウとマカアロクとの論争について考察したい。

2 価値尺度をめぐるマルサスとの論争

(1) マルサスの見解

1823年に刊行されたマルサスの『価値尺度論』の「序言」のなかにはつぎのような一文が記されていて、この著作の核心的主張がどこにあるかを端的に示している。マルサスはいふ。「私はアダム・スミスの方法とは全く異なる手続きによって、……諸商品の支配する労働をそれらの自然価値および交換価値の標準尺度とみなすことができるという結論に到達した。」⁽⁴⁾

マルサスは商品の価値の真実の尺度をその商品の支配労働量に求めるといふ見解をアダム・スミスから継承するが、しかしこの命題の妥当性を論証す

(3) *Works*, IX, p. 303.

(4) Malthus, *The Measure of Value*, 1823, p. v. ただし、本稿ではKelley & Millmanのリプリント版(1957年刊)をテキストとして使用する。

るのにスミスとは異なる方法を採用したというのである。それなら、マルサス独自の論証の手続きとは、どのようなものであったのだろうか。かれはまず、全商品が少しも資本財を使用せず労働だけで生産され、しかも即時に市場にもち出される場合を念頭におき、このような場合には諸商品の交換価値はそれらの生産に投下された労働量の多寡に照応するのであり、したがってここでは投下労働量を商品価値の尺度とみなすことができると主張して、つぎのように記している。

「もし商品の生産においても、またその生産において助力を提供する道具の生産においても、労働以外の要素が少しも必要でなく、また労働の実施から労働の報酬が完成品の形で支払われるまでの時間的間隔が全く無視して差支えないほどわずかであるとすれば、それら商品は相互に対しては平均して、それらを獲得するために投下された労働量に応じて交換されるであろう。」⁽⁵⁾「商品の生産にかかわりをもつものが労働だけであり、しかも商品が即時に市場にもち出される限り、それらの商品に投下されたさまざまな労働量がそれらの相互に対する相対価値と、それらの供給条件に関連する絶対的な自然価値との双方の正確な尺度になることが認められるだろう。」⁽⁶⁾

しかし、マルサスによれば、現実の社会における少なからぬ商品はその回収に多少の時間を要する資本の使用によって生産されており、したがってこれらの商品の価値は賃金のみから成るのではなく、賃金と利潤との両者で構成されることになる。そこで、諸商品がさまざまに異なる回収時間を要する資本を使用して生産される場合には、投下労働量を商品価値の尺度とみなすことができなくなるというのである。かれはいう。「こういう事態においては、商品は相互に対して、それらに投下された労働量に応じて交換されるというわけにはいかないだろう。」⁽⁷⁾と。

(5) *Ibid.*, pp. 5—6.

(6) *Ibid.*, p. 8.

(7) *Ibid.*, p. 9.

つぎに、マルサスはつぎのような趣旨の議論を展開する。——上記のように諸商品が異なる回収時間を要する資本の使用によって生産される場合には、多大な固定資本を使用して生産される商品やその回収に長時間を要する資本の使用によって生産される商品の価値のなかには、固定資本の使用も少なく短時間で回収される資本の使用によって生産される商品の場合に比べていっそう大きな利潤が含まれているから、利潤率の変動は前者の商品の価値を後者よりもいっそう大幅に騰落させるはずであり、したがって双方の商品の価値の変動はそれらの生産に投下される労働量の増減に比例するはずがない。⁽⁸⁾——

マルサスは、以上述べてきたところをみずからとりまとめてつぎのように述べている。「広く認められているように、進歩した文明国における大多数の商品は、少なくともふたつの要素——つまり労働〔の賃金〕と利潤とから成っている。したがって、前払の回収〔時間〕と固定・流動資本比率とがともに正確に同一であるという特殊の場合を除けば、商品の供給条件としてそのなかにこの二要素が入りこんでいる商品の交換価値が、もっぱらそれらに投下された労働量⁽⁹⁾のみに依存するということはないだろう。」

それなら、諸商品の生産に投下された資本が回収時間や固定・流動資本比率において異なっている場合には、それらの価値を正確に測定しうる尺度をなにに求めたらよいのだろうか。マルサスはこの問に答えて、真実の価値の尺度は当該商品の支配労働量に求められなければならないと主張し、その理由をつぎのように説明する。——一日の生活費に2シリングかかる労働者が独力で一日働いて生産した商品は2シリングの価値をもつだろう。そこで、もしこのような労働者が100人いてそれぞれ独力で一日働くとすれば、かれらの生産物の価値は合計で10ポンドになるだろう。ところが資本家が一日につ

(8) Cf. *ibid.*, p. 11.

(9) *Ibid.*, p. 13.

き2シリングの賃金を支払って一人の労働者を雇い、かれを100日働かせてある商品をつくり、この商品が販売されて賃金資本が資本家の手許に回収されるまでに一年を要するものとすれば、利潤率20パーセントの場合にはこの商品は12ポンドの価値をもつだろう。してみると、前者の商品の価値はその生産に投下された100日の労働によって測定することができるが、後者の商品の価値はその生産に投下された100日の労働に、労働で測った前払に対する利潤量、すなわち100日に対する20パーセントの労働を加算したもの、換言すれば120日の労働で測定されるということになるだろう。⁽¹⁰⁾——

以上のように推論してきたマルサスは、その結論を要約的にこう記した。「同一の国で同一の時期には、労働〔の賃金〕および利潤のみに分解することのできる商品の交換価値は、それに現実に投下された蓄積労働および直接労働に、すべての前払に対する労働で測られた利潤の可変量を加算して得られる労働量によって正確に測定されるように思われる。だが、これは必ずその商品の支配する労働量と同一であるにちがいない。」⁽¹¹⁾

マルサスによれば、社会の全商品が労働だけで生産され、しかも即時に市場にもち出されるのであれば、諸商品の価値はすべて賃金のみで分解するから、商品の価値はその生産に従事した労働者に支払われる賃金の価値総額に等しく、したがって、この場合には商品価値は投下労働量によって測定できる。これに反して、社会の各種商品の生産に投下される資本の回収時間や固定・流動資本比率が異なる場合には、多数の商品の価値はさまざまな割合で賃金と利潤とに分解するから、こういう商品の価値はその生産に投下された労働に対して支払われる価値総額よりも必ず大きく、したがってその価値は投下労働量によっては正確に測定できないというのである。そして、マルサスはこういう商品の価値は、その生産に投下された労働に対して支払われる

(10) Cf. *ibid.*, pp. 14—5.

(11) *Ibid.*, pp. 15—6.

価値額に、利潤額を加算したものに等しいのだから、商品価値は当該商品の生産に現実に投下された労働量に、労働で測定した利潤量を加算したもので測定されなければならないというのである。だから、マルサスの作成した上記の数字例では、12ポンドの商品の価値はその生産に投下された100日の労働に、労働で測定した利潤量、つまり20日の労働を加算したもの、すなわち合計120日の労働で測定されるというわけである。だが、この120日の労働というのは、この12ポンドの商品の支配労働量と等しい。こうしてマルサスは支配労働＝価値尺度説を唱えるのである。しかし、支配労働＝価値尺度説の妥当性を主張するには、市場で交換されるものとしての「労働」の価値不変性が論証されなければならない。

マルサスは「労働」の価値不変性を論証するために、つぎのような数字例を設けることから説きはじめる。——かりに10人の労働者に賃金として支払われるある分量の生産物が6人の労働によって生産されているとすれば、この生産物のなかの6/10は、この生産物を生産した6人の労働者に帰属する割合を示し、残りの4/10は利潤としてこの6人を雇用した資本家に帰属する割合を示すだろう。ところが、生産が困難になり、この分量の生産物の生産に7人の労働が必要になると、生産物のなかの7/10が労働者に帰属する割合となり、利潤に帰属する割合は3/10になるだろう。⁽¹²⁾——

さて、マルサスは上記の数字例からつぎのような結論をひき出すことができるかと主張する。「どんな物でも、その価値がふたつの要素から成っていて、このふたつの要素のうちの一方向の価値が増加すると、他方の価値がそれとまさに同一の割合で減少するような性質をもつことを明らかにすることができる。そういうものは不変の価値をもっているにちがいない。⁽¹³⁾」「一定数の労働者の賃金になる可変量の生産物の価値は、それが上記のように変動するふ

(12) Cf. *ibid.*, pp. 30—1.

(13) *Ibid.*, p. 31. ただし、傍点は引用者の施したものだ。

たつの要素、つまり労働〔の賃金〕と利潤との価値から成っているから、不変でなければならないのであり、したがってこれは標準尺度として提案するのが妥当なものであろう。⁽¹⁴⁾

マルサスの『価値尺度論』における積極的な主張は、以上にみてきたようなものである。だが、この著作のなかにはリカードウの『原理』第3版における「不変の価値尺度」論に対する批判的所見が見出されるから、以下でその点を紹介しておくことにしたい。マルサスはつぎのように述べている。

「リカードウ氏は金がつねにある一定分量の労働と資本とによって生産されると仮定することによって、かれの標準が『標準自体とまさに同一の事情の下で生産されたすべての物にとっては完全な価値尺度になるだろうが、他の物にとってはそうではない』と認めざるをえない。[だが、]この譲歩は、私には全く致命的であるように思われる。われわれはあらゆる事情の下で生産される諸商品の価値を測定したいのである。だが、これをなすうるものは、もっぱら労働だけで獲得される金か、もしくは労働それ自体だけなのである。⁽¹⁵⁾」

リカードウが「不変の価値尺度」として選んだものは、固定・流動資本比率においても投下資本の回収時間においても各種商品の生産諸条件のなかで「中位」にあると想定された条件の下で生産される金であった。これに対して、マルサスはリカードウが想定したような金によっては、金の場合と同一の生産条件の下で生産されるごく少数の商品の価値だけしか測定されえないのであって、そのほかの大多数の商品の価値は測定できないと主張する。マルサスの意見によれば、リカードウが想定したような金の価値は、賃金と利潤とから成っているから、利潤率の変動によってその価値はいくらか変動せざるをえないのであり、したがってこのような金は適切な価値の尺度にはな

(14) *Ibid.*, p. 32. ただし、傍点は引用者の施したもの。

(15) *Ibid.*, p. 36 footnote. ただし、傍点を施した箇所は原文のイタリック。

りえないというのである。それなら、金を価値尺度として選ぶためには、金をいかなる生産条件の下で生産される生産物と想定すべきだろうか。マルサスは金の価値が不変であるようにするには、一日の労働だけで一定量の金がつねに産出されるものと想定すべきだというのである。このような金はずねにその生産に投下された労働量と等しい労働量を支配するから不変であり、しかもその価値はすべて賃金の上に分解するから、利潤率の変動によっても少しも価値変動を蒙ることがないというのである。

(2) リカードの批判

リカードは23年4月29日づけのマルサスあて手紙で、市場でさまざまな商品や貨幣と交換されている「労働」のみがそれ自体の価値が不変な唯一の商品であるというマルサスの主張を批判した。

「学兄は不変の標準として可変の尺度を選んでおられるのです。いったい誰が、わが国民の半数の生命を奪う疫病によっても労働の価値が変更されることはないと言えるでしょうか。……また、労働者の必需品をきわめて容易に生産できる方法が発見されたが、労働者の良好な境遇が人口に与える刺激のために、必需品で測った労働者の報酬が少しも以前よりも高くはならないと仮定しましょう。……こういう場合に、一定量の穀物なり労働なりが（おそらく）以前の分量の $\frac{3}{4}$ のリンネル・毛織物または貨幣とだけしか交換されなくなるからといって、リンネル・毛織物または貨幣の価値が騰貴したのであって、労働および穀物の価値が下落したのではないと主張するのは、果して正しいでしょうか。」⁽¹⁶⁾

リカードによれば、「労働」という商品は「労働」をめぐる需給事情の変動によって価値変動を免れないだけでなく、労働者用消費財の生産事情の変更によっても価値変動を蒙らざるをえないというのである。さらにリカードはこの手紙のなかで、マルサスが自負する「アダム・スミスの方法と

(16) Works, IX, p. 282.

は全く異なる手続きによって」示した「労働」の価値不変性の論証に対して批判を加えた。

「一枚の毛織物の長さが120ヤードで、AとBとに分割されるのだとすると、Aに対して多く与えられるに応じてBに与えられるものはそれだけ少なくなり、逆の場合はその逆になるというのは明らかなことです。以上のことは、120ヤード全体の価値が100ポンドになろうと、50ポンドないし5ポンドになろうと、真実でありましょう。そうだとすると、分量が不変だからという理由で、またそれがつねに二人の間で分割されるからという理由で、不変の価値をもっと考えるのは、論点窃取の虚偽を犯すことになるのではないでしょう⁽¹⁷⁾か。」

リカードウによれば、マルサスはかれがこれから証明しなければならぬ「労働」の価値の不変性という命題を暗黙裡にあらかじめ前提に据えておいて、そこから推論を展開しているにすぎないというのである。

さて、こういう内容の批判を含んだリカードウの手紙を受けとったマルサスがそれから間もなく反批判の返書を書いたのは確かなことだが、残念なことにこのマルサスの返書は失われて現存していない。だが、このマルサスの返書に接したリカードウは5月28日づけの手紙で、リカードウの「不変の価値尺度」論に対するマルサスの批判に対して反駁文を書いた。

「学兄はこの〔価値尺度の〕問題についての私見に対する異論として、労働と資本との結合によって生産される一商品は正確に同一の事情の下で生産される商品以外のものに対しては価値の尺度になりえないと述べておられますが、私はこの点では御高見が全く正しいと認めてきました。もし全商品が資本の助けを借りずに一日で労働のみによって生産されるのだとすれば、商品〔の価値〕はその生産に投下される労働量の増減に比例して変動するでしょう。もし貨幣の生産につねに同一量の労働が投下されるとすれば、貨幣は

(17) *Works*, IX, p. 283.

正確な絶対価値の尺度になるでしょう。……こうした事情の下では、一日の労働の生産物であるあらゆる商品は、当然一日の労働を支配するでしょう。したがって、商品の価値はそれが支配する労働量に比例するでしょう。しかし、こういう貨幣はそれと正確に同じ事情の下で生産されるあらゆる商品の価値を正確に測定するけれども、多量の資本を長時間にわたって使用して生産される他の商品の価値を測る正確な尺度にはならないでしょう。⁽¹⁸⁾

リカードは「中位」の条件の下で生産された金が金と全く同一の生産条件の下で生産される商品に対してだけしか正確な価値尺度にはならないというマルサスの批判を全面的に承認した。これは、いっさいの財貨の生産事情が不変のままである場合でさえも、賃金ないし利潤率の変動があれば、金が金とは異なる生産条件の下で生産される多数の商品に対しては、その相対価値にならざるを得ないことを、リカード自身から認めていたからであった。その結果リカードは、現実に存在する各種商品がさまざまに異なる回収時間を要する資本の使用によって生産される以上、金をどのような生産条件の下での生産物と想定しようと、それはけっしてあらゆる商品に対する「完全な価値尺度」にはなりえないという点を認めたうえで、われわれにとって可能なことは「不変の価値尺度」にできる限り「近似的な」尺度を求めることであり、それには金の生産条件を「中位」のものと想定すべきだと主張したのであった。

ところが、こういうリカードの所見に対して、マルサスは「労働」こそが「完全な価値尺度」であると主張し、それにもとづいて、貨幣は一日の労働だけで産出される一定量の金から成るものと想定すべきだと言明していたのである。だが、こういうマルサスの批判に対して、リカードはつぎのように応酬したのであった。すなわち、リカードによれば、たとえ貨幣がマルサスの想定したような生産条件の下で生産される金から成るとしても、こ

(18) Works, IX, pp. 297—8. ただし、傍点は引用者の施したもの。

ういう貨幣が正確な価値尺度になりうるのは、一日の労働だけで生産される少数の商品に対してだけであり、一日よりも長い回収時間を要する資本の投下によって生産される多数の商品に対してはけっして正確な尺度にはなりえない。しかも、賃金ないし利潤の変動が回収時間の比較的長い資本によって生産される商品の価値に及ぼす影響の大きさをマルサスの貨幣で測定した場合には、商品価格の変動はリカードウの貨幣で測定した場合よりもはるかに増幅して示されることになるというのである。

以上のような見解をリカードウは5月28日づけのマルサスあての手紙のなかで、簡潔につぎのように記している。「私のただひとつの目的は、学兄が資本を全く使用しない特殊の場合にだけ正確であると認められる価値尺度を、資本と〔その回収〕時間とが必ず考慮されなければならない場合に適用されるのは恣意的であるということを明らかにすることだけなのです。」⁽¹⁹⁾

(3) 論争の継続

リカードウから上述したような批判を加えられたマルサスは、これに全面的に反撥した。マルサスの反批判のなかの一論点は、リカードウの「不変の価値尺度」論に対する攻撃を続行することによって提示された。かれは8月11日づけのリカードウあての手紙のなかで、つぎのように書いた。「私が学兄の価値尺度を非難するのは、それが他の諸商品の利潤の変動とともに変動し、したがってどうしてもこれらの商品〔の価値〕の変動をかなりの程度の正確さをもって測定することができないからなのです。」⁽²⁰⁾

マルサスによれば、リカードウの貨幣は「中位」の生産条件の下で生産される金から成るものと想定されており、したがってその価値はある一定の割合の賃金と利潤とから成っているため、利潤率の変動とともにこの価値尺度財自体の価値も変動せざるをえないから、とうてい「中位」以外の生産条件

(19) *Works*, IX, p. 300.

(20) *Works*, IX, p. 337.

の下で生産される他の商品の価値を正確に測定することはできない。これに反して、マルサスの貨幣は一日の労働だけで生産される金であるから、その価値のなかには少しも利潤が含まれておらず、したがっていかなる利潤率の変動があってもそれ自体の価値が変動することはないというのである。

そして、かれは同じ手紙のなかで、「労働」の価値不変性をリカードに説得するために反覆して説明する労をとることを厭わなかった。「同一量の労働を支配する可変的な賃金は、もし……その価値が労働〔の賃金〕と利潤とから成っているとすれば、同一の価値をもっているにちがいないのであり、これは白日のように明らかであるように思われます。なぜなら、その賃金の生産には労働とその労働に対する利潤との同一量がつねに費やされているからです。御高説では、賃金の生産に投下される労働が増加する時には賃金の価値は騰貴するということになっています。賃金の価値のなかの前払された労働に分解する部分に関する限り、賃金の価値は増加することになるという御高見には、私は全面的に賛成します。しかし、学兄は賃金の価値が労働と利潤とから成っているのではなく、労働だけから成っているとみなしておられる点で重大な誤りに陥っているのです。」⁽²¹⁾

マルサスはリカードが「労働」の価値の可変性を主張したことに対して、つぎのような批判を加えている。——リカードは一定数の労働者に支払われる賃金が一定量の生活資料の価値に等しいと考え、それにもとづいて、生活資料の生産の困難が生活資料の価値の上昇、ひいては賃金の価値の上昇をひきおこすと考え。しかし、一定数の労働者の賃金に支払われる生活資料は、その生産に投下された労働量よりも大きな労働量を支配するのであり、したがってその価値はそれを生産するために前払された賃金だけではなく利潤をも含んでいる。したがって、生産事情が悪化すれば、確かにそれだけの生活資料を生産するのに必要な労働量は増加し、生活資料の生産のために前

(21) Works, IX, p. 339. ただし、傍点を施した箇所は原文のイタリック。

払されなければならぬ賃金は増加するだろうが、賃金が増加した分だけその生活資料の価値のなかに含まれる利潤が少なくなるはずだから、一定数の労働者の賃金として支払われる分量の生活資料の価値は不変といわなければならないのだ。――

しかし、「労働」の価値不変についてのマルサスのこのような論証方法はリカードウには「論点窃取の虚偽を犯すもの」としか思えなかった。リカードウはその点を4月29日づけの手紙のなかですでに指摘していたが、8月3日づけの手紙のなかでつぎのように論評していた。「学兄は私に、価値の増加とは労働支配力の増加のことだと言われます。私はこの定義が正しいとは思わないのです。なぜなら、私は学兄の選んだ標準尺度の〔価値〕不変性を認めないからです。学兄はその不変性を立証するために、生産物全体が分割される割合について言及され、賃金の占める割合が増大すれば利潤の占める割合は減少すると述べておられます。この点はすべてお説のとおりです。しかし、学兄はこの命題と学兄の価値尺度の不変性との間にどのような関係を立証されているのでしょうか。御返事のなかで、学兄は『価値の増加』という言葉を使っておられます。だが、これは理解することが求められている言葉の意味を説明するのにその言葉自体を使うということになります。」⁽²²⁾

リカードウによれば、一定の価値をもつ生産物が賃金と利潤とに分割されるなら、賃金の占める割合の増加は当然それに応ずる利潤の占める割合の減少をもたらすのであり、この命題は自明のものである。しかし、問題なのは一定数の労働者に賃金として支払われるある分量の生活資料の価値が果して一定なのかどうかということである。ところが、マルサスの論法はその生活資料が一定数の労働者の賃金として支払われているのだから、それはつねに一定量の労働量を支配しており、したがって価値不変だという命題をなんの論証も与えないで最初から正しいものと考えておいて、そこから推論を開始

(22) *Works*, IX, p. 324.

しているにすぎないのだというのである。

しかし、こういうリカードの批判を浴びたことはマルサスにとって全く心外であった。マルサスは8月11日づけの手紙のなかで躍起になって抗議をした。

「学兄はある箇所で、私見は価値の増大が労働支配力の増大であると定義しながら、その理由を与えないものだという論難をしているように思われますが、私見がこういう論難に曝されるのは妥当であるとは思いません。労働の価値の不変性は正真正銘私の結論なのであって、けっして私が出発点においた定義なのではありません。⁽²³⁾」

しかし、マルサスの強硬な抗議もリカードの応答を変更させることができなかった。リカードは8月15日づけのマルサスあて手紙のなかでも、つぎのように書いた。「労働者に与えられるものがどれほどであろうと、それは労働〔の賃金〕と利潤とから成っており、したがって労働の価値は不変なのだ！ と。これが学兄の命題なのです。だが、この命題は私にとっては明晰さのあらゆる属性を欠いているものです。⁽²⁴⁾」

文通による論争もいまは全く膠着状態に入って、論争からの実りは期待できなかったけれども、マルサスはさらに8月25日づけの手紙を書いてリカードを説得することに努め、リカードも8月31日にそれに対する返書を書いた。しかし、これらの手紙はどちらもそれまでの自説を反覆するものでしがなく、双方の主張は互いに交わることなく平行線を辿ったにすぎなかった。だから、われわれもこれらの手紙の内容を紹介する必要はないだろう。われわれはただこの8月31日づけのリカードのマルサスあて手紙が、1811年から開始されたこの二人の文通における最後の手紙になったということだけを書き添えておくに止めたい。

(23) *Works*, IX, p. 340. ただし、傍点を施した箇所は原文のイタリック。

(24) *Works*, IX, p. 351.

リカードウはかれの遺稿「絶対価値と交換価値」のなかで、かなりの紙幅を割いてマルサスの価値尺度論に対する批判的検討に捧げているが、その内容は、われわれが上来考察してきたような23年4月から8月までのマルサスとの文通による論争の経緯を、リカードウの側から要約的に記録したものにほかならなかった⁽²⁵⁾のである。

3 マカァロクとの論争

(1) リカードウの問題提起とマカァロクの応答

本稿第1節で述べたように、1823年初夏の頃にロンドンで口頭での討論によって開始されたリカードウとマカァロクの価値規定および価値尺度論をめぐる論争は、マカァロクがエディンバラに帰ってしばらくしてから、文通によって再開された。リカードウは8月7日づけのマカァロクあて手紙のなかで、つぎのように述べた。

「困難な価値の問題が私の思索をひきつけてきましたが、私は迷路からの出口を満足できるようには見出せないでいます。……私は地下室に3年ないし4年の間貯蔵されているぶどう酒の困難や、もともとは労働の点では多分2シリングも支出されなかったのに、それでいて100ポンドの価値をもつようになる樫の木の困難を克服することができないのです。これらすべてのものをわれわれの選んだような価値尺度で測定するという点では、困難はありません。しかし、なぜわれわれがその尺度を選んだのかを説明する点では、また、価値尺度としては当然のことですが、その尺度がそれ自体不変である⁽²⁶⁾ということを証明する点では、困難があるのです。」

この一文は、リカードウがマカァロクと会見した折の討論を前提として書

(25) Cf. *Works*, IV, pp. 371—3 ; 390—3 ; 406—10.

(26) *Works*, IX, pp. 330—1.

いたものであるように思われるのであって、第三者であるわれわれにはいくらか理解し難いが、ここでかれがマカアロクにつきつけた問題がつぎの論点に関連するものだけということだけは確実であろう。すなわち、リカードはすでにかれの『原理』第3版のなかで、諸商品が「市場にもち出されるまでに経過しなければならぬ時間」に差異があれば、それらの価値は「それらに投下された労働量には正確には比例しない。⁽²⁷⁾」と主張し、「この価値の差異は……利潤が資本として蓄積されたことから生ずるのであり、これはただ利潤が保留されていた時間に対する妥当な補償であるにすぎない。⁽²⁸⁾」と言明していたが、このマカアロクあて手紙では上記論点についてさらに考察を深めようと意図しているように思われる。

リカードはこの手紙で、その生産に投下された資本の回収にきわめて長時間を要する商品、例えばぶどう酒とか樹木とかをとりあげ、これらの商品の価値はその生産に現実投下された労働量に比べて異常に大きいという点を問題にしている。そして、これらの商品の価値を測定するにはいかなる生産条件の下で生産される財貨を価値尺度に選んだらよいのか、その点が問題なのだ、とリカードは述べている。

リカードの提出した問題に対して、マカアロクは8月11日づけ返信のなかで、「もし大兄がすべての交換価値は労働量のみによって評価されるべきであるという命題に対して、疑問を抱かれるようなことがなかったなら、私自身が疑問を抱くようなことは全くなかったでしょう。」と前置きしながら、つぎのような回答を記した。長文ではあるが、リカードとマカアロクとの論争における係争点を形づくる重要なものと思われるから、煩を厭わず引用しておこう。

「私は時間を考慮することをいっさい排除しているわけではありません。

(27) *Works*, I, p. 34.

(28) *Works*, I, p. 35.

(29) *Works*, IX, p. 342. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。

私はただ、その価値が測定されるべき商品に現実に支出されてきた労働量や商品に仕上げられている労働量を発見するのに役立つ限りで、時間を考慮するにすぎないのです。時間それ自体がなんらの効果も生むものではないということは言うまでもありません。時間はただ、有効な動因が実際に効果をあげるのに必要な場を提供するにすぎないのです。しかし、これらの動因が労働者であるのか、それとも商品の生産のさいに自然自身が営む過程であるのかということは、もしこれらの動因を機能させるために等量の資本が必要であるとすれば、私にはどうでもよいことのように思われます。もしわれわれが労働者に賃金を与えれば、かれらはこの賃金とその前払期間とに対する等価を払い戻すでしょうが、これはちょうど、われわれが自然という動因を使用する場合にそれが成し遂げるのと同じことであるにすぎません。……どちらの場合にも一定額の資本が使用されているとすれば、それはつまり一定の効果をあげるために一定量の労働が使用されているということなのです。そこで、もし資本が等額であって、効果が生み出されるまでの時間が異なるのであれば、それは直ちに、一方の効果を生むのに必要な労働量が他方の場合に必要労働量よりもいっそう多かったということの証拠になりますし、またどれほどより大きな労働量であるのかを示す指数になります。⁽³⁰⁾」

マカァロクによれば、回収時間に差異のある資本の投下によって生産される二商品の価値の差異もそれらに投下された労働量の差異にもとづいて生まれたものとみなすことができるというのである。リカードウが地下室に長期間貯蔵されたぶどう酒が高価であるのは、その生産に投下された労働量によっては説明できないと主張したのに対して、マカァロクはぶどう酒の醸造に投下された資本の回収に長時間を要したという事実が、ぶどう酒に投下された労働量がきわめて多大であったことを証明するのだと回答した。マカァロクによれば、なるほどぶどう酒の醸造において労働者が実行した労働の分量

(30) *Works*, IX, pp. 342—3. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。

はけっして多量ではなかったけれども、しかし、ぶどう酒が地下室に貯蔵されていた長期間にわたって「自然という動因」がぶどうから搾りとられた液体を熟成したぶどう酒に転化すべく機能しつづけたのであり、換言すれば貯蔵期間を通じて自然が多量の《労働》を行ったのであり、その結果ぶどう酒は高価になったというのである。

つぎにマカエロクは、苗木を植えるさいにわずかな労働が投下されただけで、あとは自然に委ねられて放置されたのに、数多の年輪を刻めばきわめて高価に販売される樹木の場合をとりあげて、つぎのようにいっている。「その生産に使用された資本は少額でした。しかし、この資本が使用されてきた時間の長さがこの生産物を多量の労働の所産にしたのであり、したがってそれをきわめて高価にしたのです。⁽³¹⁾」

ところで、このマカエロクの手紙のなかにはリカードとマルサスとの間の「不変の価値尺度」の選定をめぐる論争に言及した一文がある。マカエロクはつぎのように指摘した。「商品の交換価値を決定する事情とその価値を測定する尺度との間には根本的かつ本質的な差異があります。ところが、〔御高見においては〕この点が必ずしも十分に考慮されていないのではないかと思います。もしわれわれが価値を測定すべきであれば、われわれは価値をもつなんらかの商品の媒介によってその価値を測定しなければならないのであり、マルサス氏の提案するように、価値を与えるために使用される動因に照合することによって測定してはなりません。そして、あらゆる商品の生産事情はつねに変動を蒙り易いにちがいないのですから、どんな商品も不変の尺度にはなりえません。もっとも、あるものが別のものよりはるかに変動が少ないということは確かにありますから、これを近似的尺度として用いるということはできるでしょうが。私見によれば、真実かつ不変の価値標準は明らかにありませんし、あるはずもありません。だが、もしそうであれば、け

(31) *Works*, IX, p. 344.

つして見つかるはずのないものを探索するのは全く無駄なことであるにちがいない⁽³²⁾。」

マカアロクはこの一文で、一方では商品の価値の測定にあたって「価値を与えるために使用される動因」つまり「労働」そのものを価値尺度とみなすマルサスの見解を批判して、商品価値の測定にあたっては労働と資本との投下によって生産されるなんらかの商品を価値尺度として用いるべきだと説いているが、他方ではどんな商品も生産事情の変動に曝されているから、どの商品を尺度に選んでも、それはけっして「不変の価値尺度」にはなりえないということを強調している。その結果、マカアロクは近似的尺度を見出すことでこの問題の追究を打ち切るべきだと提案し、リカードウが近似的尺度を手に入れることを越えて「不変の価値尺度」を探索しつづけていることに反感をもちえないと率直に述べたのであった。

(2) リカードウの批判

マカアロクの8月11日づけの手紙を読んだリカードウは、これに対する反論を8月21日づけのマカアロクあて手紙のなかに書いた。ただし、リカードウはこの手紙を書くためにその下書と思われる手紙文を8月15日頃書いている。そして、下書と浄書された手紙とは大半は同一趣旨の所見を含んでいるが、一部論点については下書のみにならされていて浄書された手紙のなかには見出されないものがある。こういう事情を考慮して、われわれは以下8月21日づけのリカードウの手紙の内容を、下書の文面をも参照しながら検討したいと思う。

リカードウはこの手紙で、投下資本の回収時間の差異を投下労働量の差異に還元するという仕方で労働価値論を護持しようとするマカアロクの論法を非難した。かれはまず、つぎのように記した。「一人の52週間の労働によって生産される一商品は、52人の一週間の労働によって生産される別の商品より

(32) *Works*, IX, p. 344.

もいっそう大きな価値があるし、またそうでなければならない。⁽³³⁾すなわち、二商品の生産に投下された資本の回収時間に差異があれば、等しい労働量が投下されていても、この二商品の価値は等しくない。それなら、52週の回収時間を要する資本によって生産された商品の価値のほうがより大きいのはなぜか。リカードはこのような問題を提出しながら、つぎのように記した。

「われわれはみな、2シリングが複利での利潤による年ねんの蓄積を伴ってついに100ポンドを生むということ、そして利潤の均等性が維持されるにはそうならなければならないということを認めています。しかし私は、この蓄積された利潤を労働という名称で呼び、そのようにして100ポンドの価値をもつ商品がそれに投下された労働量に比例した価値をもっているのだと主張することの妥当性を疑います。⁽³⁴⁾」

リカードの見解はこうである。——マカァロクはその回収に長時間を要する資本によって生産された商品が高価であるのは、結局はその商品が多大な分量の労働の所産であったからだと言い張っている。しかし、これらの商品が高価になった理由は、資本の回収に長時間を要した結果年ねんの利潤の蓄積が巨額に達したためである。マカァロクは「この蓄積された利潤を労働という名称で呼ぶ」ことによって、商品価値は投下労働量に比例するという命題をなんらの例外も認めずに確立しようとしているが、これは「労働という名称」の濫用でしかない。——

こうしてリカードの見解によると、その回収に長時間を要する資本によって生産される商品の価値は、その生産に投下される労働量に比例するよりもいっそう大きい。それなら、このような商品の価値をどのようにして測定したらよいのか。リカードが価値尺度の選定の問題を考えつづけたのは、こういう事情からであった。だから、価値尺度の選定問題に関するマカァロ

(33) *Works*, IX, pp. 359.

(34) *Works*, IX, pp. 358—9.

クの所見は、リカードウには不満であった。この8月21日づけの手紙のなかでも、かれはマカアロクを批判して、つぎのように書いた。「学兄は商品の交換価値を決定する事情とその価値を測る尺度との間には大きな差異があると指摘しておられますが、私はこれを認めません。価値を測定しなければならない場合には、価値をもつなんらかの商品を媒介にしてその価値を測らなければならないという御高見には、私は賛成します。——だが、これはマルサス氏もわれわれもみながそうしようとしていることなのであって、われわれの間の唯一の相違は、われわれが尺度として選んだ商品の価値——つまりその不変の価値を決定する事情に関してなのです。そうだとすれば、われわれが商品の価値を決定する事情について知識をもてば、直ちにわれわれが不変の価値尺度を手にいれるのに必要な条件がなんであるかを言えるようになるということは明らかではないでしょうか。⁽³⁵⁾」

すでに知ったように、マカアロクはいかなる商品もつねに生産事情の変動に曝されているから、それ自体の価値の不変な商品は存在するはずはなく、したがって「不変の価値尺度」を探索するのは無益だと考え、商品価値の決定原理を解明することと「不変の価値尺度」を選定することとは別問題だと述べていた。これに対して、リカードウは現実に存在するすべての商品の価値が可変的であるのは事実だが、さまざまな商品の価値を正確に測定するには「不変の価値尺度」を探索することが必要不可欠であって、それにはある商品にそれ自体の価値を不変のまま維持せしめる条件がいったいなんであるかを確定しなければならないのだというのである。そして、リカードウは商品価値の決定原理を解明することによっておのずからこの条件を確定するための道がひらけるはずだと主張するのである。

しかし、すでに知ったように、商品価値の決定原理についての理解の点で、リカードウとマカアロクとの間には小さくない意見の相違があった。その回

(35) *Works*, IX, p. 358.

収に長時間を要する資本によって生産される商品の高価を労働量に還元して説明できるかどうかという点で、両者は意見を異にしていた。この点の意見の相違が価値尺度論のちがいを生み出す根源になっていたように思われる。リカードはこの手紙のなかで、以上の論点に関連してつぎのように記していた。

「[商品の] 価値はふたつの要素、つまり考えられるあらゆる割合で混合されている賃金と利潤とから成っています。したがって、学兄の尺度が賃金と利潤との割合において測定される商品と正確に一致しているのでなければ、正確に測定しようと企てても無駄です。賃金だけを含んでいて利潤を含まない商品がマルサスの尺度なのですが、これは労働〔の賃金〕と利潤とをともに含む商品に対しては正確な尺度にはなりません。われわれにできることは、明らかに不完全な尺度のなかから最善の選択をすることだけです。だから、もし労働だけで生産される商品が³⁶最大多数を占めているのであれば、私は躊躇なくマルサスの尺度を選ぶでしょう。ところが、事実はその反対であって、大多数の商品は一定期間にわたる労働と資本との結合によって生産されますから、私は私がいままで行ってきた選択を修正する必要はありません。私はそれを³⁶中位のものとみなします。マルサスの尺度は目盛の一方の極端にありますし、古い樫の木は他方の極端にあります。……したがって、これらはどちらも価値尺度には適していないのです。」

リカードが問題にしているのは、その生産に投下される労働量が不変であるような商品が存在すると仮定した場合でさえも、この商品を直ちに価値尺度に選ぶことはできないという点である。なぜなら、回収時間に差異のある資本の使用によって生産される諸商品の価値は投下労働量に比例して決定されているのではないからである。そこで、近似的な尺度を選ぶといっても、果していかなる回収時間を要する資本の生産物を選んだらよいのかという点

(36) Works, IX, p.361. ただし、傍点は引用者の施したもの。

が解決困難な問題として残らざるをえない、トリカードウはいうのである。かれの意見では、マルサスの尺度は一日の労働だけで生産される商品であり、このような商品は例外的存在であるから、尺度としては不適当だというのが、資本と労働との結合によって生産される商品のなかから尺度を選ぶ場合にも、その生産に使用される資本の回収時間に差異があることを考えれば、問題はそれほど簡単に解決されるわけではないというのである。かれはこの点の困難をつぎのように説いている。

「かりにぶどう酒と毛織物とがともに同一量の資本を用いて一年で生産され、新たに醸造されたばかりのひと樽のぶどう酒と一定量の毛織物とがそれぞれ50ポンドの値であると仮定しましょう。もし利潤が一年につき50パーセントだとすれば、醸造後一年貯蔵されたひと樽のぶどう酒は75ポンドの値になるでしょうし、二年貯蔵されたものなら112ポンド10シリングの値になるでしょう。——しかし、毛織物はつねに50ポンドの値でありましょう。さて、もし利潤が5パーセントに下落すると、毛織物とたったいま醸造されたばかりのぶどう酒とは以前と同じで、それぞれ50ポンドの価値をもっているでしょうが、——しかし、一年貯蔵されたぶどう酒は52ポンド10シリングの値になり、二年貯蔵されたものなら55ポンド2シリング3ペンスの値になるでしょう。使用された資本の価値は正確に同一で、使用された労働量も同一です。そこで、〔資本の回収に要する〕時間が同一である限り、完成品の価値もまた同一です。われわれがこうして諸商品が利潤の変動のために変動するのを認めるなら、果して商品の生産に必要な労働量の増減以外に〔商品価値の〕⁽³⁷⁾変動の原因はないと主張することは正しいでしょうか。」

リカードウはここでふたつの問題点を指摘している。ひとつは、回収時間に差異のある資本の使用によって生産される諸商品の相対価値は投下労働量には比例していないことが明らかである以上、各種商品の絶対価値の大きさ

(37) Works, IX, p. 362.

はどのようにして測定されるか、という点である。もうひとつは、上記のような諸商品の相対価値は、たとえ各種商品の生産事情になんの変化も生じなかったとしても、利潤率の変動によって変動することが明らかである以上、この間にどの商品の絶対価値が不変であり、別のどの商品の絶対価値がどれだけ騰貴もしくは下落したかということとはどのようにして測定されるのか、という点である。リカードはこのふたつの問題点を念頭におきながらかれの独自の価値尺度論を展開しようとしているように思われる。

リカードはこの8月21日づけの手紙のなかでは、上記のふたつの問題点と価値尺度の選定の困難との関連については明示的には言及していないけれども、かれが8月15日頃書いたこの手紙の下書のなかでは、この点に言及して、つぎのように指摘している。

「真の困難はつぎの点にあります。ここに二種類の商品があつて、どちらも労働によって、しかも労働のみによって生産されたものです。一方は1日で生産されて市場にもち出されていますが、他方は365日かかっています。前者は1ポンドの値ですが、後者は365ポンドよりもはるかに大きな値です。利潤が5パーセントの場合には後者は383ポンド5シリングの値ですが、10パーセントの場合には401ポンド10シリングです。——それなら、われわれはこの二商品のうちのどちらを価値尺度とすべきなのでしょう⁽³⁸⁾か。」

リカードの問題はこうである。——365日間にわたる労働の使用によって生産される商品の価値は、1日だけの労働の生産物の365倍よりも大きく、その相対価値は投下労働量に比例していない。そうだとすれば、それぞれの絶対価値はどのようにして測定されるのか。そのうえ、両商品の生産事情になんの変化もおこらないとしても、利潤率が変われば、その相対価値は変動する。そうだとすれば、その間にどちらの商品の絶対価値が不変であり、どちらが騰貴ないし下落したのか。その点をどのようにして確認することがで

(38) *Works*, IX, p. 354.

きるのか。——

リカードウはこのように問題を提起しながら、ここで「完全な価値尺度」を見出すことができるなら、難問は解決されるけれども、しかし、そういう尺度は手に入らないと考えて、つぎのようにいう。「事實は、十分に正確な尺度とみなすことができる絶対価値の尺度といったようなものはないのです。」⁽³⁹⁾と。

それなら、われわれは絶対価値の尺度を手に入れることを断念するほかないのだろうか。リカードウは正確な尺度を見出すことはできないけれども、近似的尺度を手に入れることはできると考えて、つぎのようにいう。「〔リンネルの〕価値はふたつの要素、つまり賃金と利潤とから成っています。それゆえ、それはこれらの要素がリンネル自体のなかで混合されているのと正確に同じ割合で混合されている（価値をもつ）商品によってしか正確には測れません。厳密に言えば、ひとつの商品を測定するのに適したものは、他の商品の測定には適しません。しかし、もしわれわれがこの高い精密度を必要としないなら、時間の点で最大多数の商品が生産される条件とほぼ近似した条件のもとで生産される商品をわれわれの尺度として選ぶことによって、われわれはこれを正確な価値尺度に最も近似したものとするでしょう。（なぜなら、利潤と賃金とがさまざまな商品のなかに入りこむ割合に差異を生ぜしめるものは時間だけだからです。）そして、〔価値の〕変動がその生産に使用される労働量の変動によってひきおこされるものである限りは、われわれの尺度として選ばれるものはそれ自体〔その生産に使用される労働量が〕不変でなければなりません。」⁽⁴⁰⁾

リカードウによれば、いかなる商品の生産事情にもなにも変動がなかったのに、利潤率が変動しただけで、諸商品の相対価値が変動するのは、これら

(39) Works, IX, p. 356.

(40) Works, IX, p. 356. ただし、傍点は引用者の施したもの。

がさまざまに異なる回収時間を要する資本によって生産されており、したがってそれぞれの商品価値のなかに含まれる賃金と利潤との割合が異なっているためである。そういうわけで、どの商品を価値尺度に選んでも、それはその価値尺度財の生産に使用される資本と同一の回収時間を要する資本によって生産される商品の価値だけしか正確に測ることができないのであって、普遍的に適用することのできる「完全な尺度」を手に入れることはできない。だが、どのような商品であっても、その価値が基本的にはその生産に投下された労働量に依存していることは確かなことだから、われわれには「完全な尺度」に可能な限り近似した尺度を手に入れる道は残されているというのである。

そして、リカードは「時間の点で最大多数の商品が生産される条件とほぼ近似した条件のもとで生産される商品」を価値尺度として選ぶことを提唱する。この尺度でなら、全商品のなかで最大多数を占めるものについて、その絶対価値の近似値を測定できるからだというのである。

(3) マカアロクの応酬

リカードの批判に接したマカアロクは、直ちに8月24日づけの返信を書いたが、少しもリカードに譲歩しなかった。かれはつぎのように主張した。「われわれが生産に使用した資本とひきかえに回収する追加価値は、果して時間に対する補償、すなわち資本を即時に消費しなかったという点での自制に対する補償なのか、それとも資本の使用から生じた積極的な追加価値であって、時間には依存しないものなのか、そのどちらなのでしょう。……私見によれば、利潤は時間に対する補償ではなく、積極的な追加価値なのです。私がそう考えるのは、つぎのような理由からです。すなわち、もし私がひと樽のぶどう酒を12か月貯蔵し、ぶどう酒にある効果が生ずるなら、私は利潤をあげるだろうが、これに反して、もし私がすでに熟成したぶどう酒を貯蔵して、100年経ってもぶどう酒にはなんの効果も生じないとすれば、

私は少しも利潤をあげないだろうからです。⁽⁴¹⁾

マカァロクによれば、ぶどうから搾りとられた液体が一年間貯蔵された後に価値を増殖し、業者に利潤をもたらすのは、貯蔵期間中に「自然の動因」がこの液体に有効に作用した結果、貯蔵前に比べてぶどう酒がいつそう「多量の労働の所産」となったためだというのである。だから、マカァロクの意見では、利潤は「労働」によって産出された「積極的な追加価値」なのであって、リカードウのいうように「時間に対する補償」とみるべきものではないというのである。

だが、以上のようなマカァロクの所論は、かれ自身の前便の議論の繰り返しにすぎないから、その点ではわれわれとしてもこれ以上は上記論点について考察する必要はないだろう。そこで、われわれはリカードウの価値尺度論に対するマカァロクの反応に眼を移すことにしたい。この手紙でマカァロクはつぎのように記している。

「私はただ同一の市場における諸商品の相対価値を決定する事情を確認しようとしておめているにすぎないのです。——大兄とマルサズとの間で騒ごうしく争われている問題は、私の問題とは全く異なるものです。——それはある商品に価値の不変性を賦与するのに必要な条件とはいったいなかという問題です。——だが、これは私には全く解決不可能の問題のように思われます。それはともかくとしても、この問題は私の研究領域には入っておりません。——この問題の解決は碩学の方がたにお委せいたします。——私は経済学のなかのこういう深遠な部分に立ち入る前に、その初歩についての知識を現在よりもいつそう確実に身につけなければなりません。ですから、私はアウグストゥスやジョージ四世の治世下の毛織物やぶどう酒の価値を測る尺度を手にいれようと試みる前に、同一市場におけるそれらの価値を測る尺度を

(41) Works, IX, pp. 366—7. なお、邦訳書のなかのこの引用文中最後のセンテンスの訳文には疑問の箇所がある。

手に入れなければなりません。⁽⁴²⁾」

すでに知ったように、リカードはさまざまに異なる回収時間を要する資本の使用によって生産される諸商品の相対価値が相対的な投下労働量には正確には比例していないという点、さらにまた、それらの諸商品の相対価値の変動が投下労働量の増減によって引き起されるばかりでなく、賃金ないし利潤の騰落によっても引き起されるという点を、明確に認識していた。この認識にもとづいて、かれは商品価値が投下労働量に比例して決定されるという命題にはいくらか「修正」が施されなければならないと考えた。その結果、リカードにとっては、それぞれの商品の絶対価値を測定し、隔たった時点におけるそれぞれの商品の価値の騰落を正確に測定しうる尺度をどのようにして手に入れることができるのか、という点が重要な研究課題となった。

これに反して、マカアロクは回収に比較的長時間を要する資本の使用によって生産される商品がその生産に現実に投下された労働量に比例するよりもいっそう大きな価値をもつ理由を、その期間に「自然の動因」が作用したためだと説くことによって、回収時間の差異が価値額に及ぼす影響を労働量の差異に還元できると考えた。その結果、かれにとっては、商品の相対価値は相対的な投下労働量に比例するという命題は、なんらの修正を施す必要のない妥当性をもつ真理と考えられたのであったから、リカードのように絶対価値の尺度を探索することは無用な試みとしか思えなかったのである。

さて、以上のような内容を含むマカアロクの8月24日づけの手紙がリカードの手許に届いたのは、おそらく27日か28日頃であっただろう。だが、これに対する返信を書かないうちにリカードは死病の床に臥してしまった。だから、われわれはこの8月24日づけの手紙に記されたマカアロクの所論に対してリカードがどのような感想をもったかという点について詳細に知ることはできない。しかし、われわれがすでに知ったように、この8月24日づ

(42) *Works*, IX, p. 369.

けのマカァロクの手紙の内容は、8月11日づけの手紙と比べて、格別新しい論点を提示しているものではないから、おそらくリカードウはマカァロクの回答に失望したことだろう。付言すれば、かれがこのマカァロクの手紙を読んだ後のことと思われるが、かれは8月31日づけのトラワあての手紙のなかで、マカァロクの所論に対する論評をつぎのように書き記していた。

「マカァロクによれば、かれは価値の尺度を探索しているのではなく、かれの唯一の目的は諸商品の相互に対する相対価値を規制するものがなんであるかを知ることにあるのだということです。そして、それはそれらの生産に必要な労働量なのだ、とかれは主張しています。しかし、マカァロクは労働という言葉を一一般の経済学者とはいくらちがった意味で使っているのです。そして、もしわれわれが商品の交換価値を規制する法則についての知識をもてば、われわれは絶対価値の尺度を発見するわずか一步手前まで来ているのだということが、かれには分ってはいないように思われます。⁽⁴³⁾」

リカードウの批評はかれの8月21日づけのマカァロクあて手紙のなかに詳述された所見の簡潔な要約とみることができるだろう。

リカードウは遺稿「絶対価値と交換価値」のなかでも、マカァロクの価値論に対する論評を記しているが、その記述内容もまた8月21日づけのマカァ⁽⁴⁴⁾ロクあて手紙で記述されたものの要約的再説にすぎなかったのである。

[追記]

本稿の印刷中に、私は中村広治氏の御教示によって、P. L. Porta, *Ricardo's unpublished last Words on the Subject of Value*, *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali*, Vol. 26, no. 1, 1979. のなかに、これまで未公開であったリカードウの手稿 *Notes on Malthus' Measure of Value* が印刷されていることを知った。本稿の主題の考察にとって重要な新資料であるから、他日検討したい。

(43) *Works*, IX, p. 377.

(44) Cf. *Works*, IV, pp. 376 — 7 ; 410 — 2.